

『国家』(上)一正義について一

■第一巻

一	グラウコンと一緒にお祭りに行ったソクラテスが、帰りがけにポレマルコスに引き留められる。
二	老人ケパロスとの再会 ソクラテス「高齢の方々とは話をかわすことは喜び。やがてはおそらくわれわれも通らなければならない道を通られた方々に、その道がどのようなものかということをおかかなければならない」
三	老いることの喜びについて ケパロス「多くの方は老年が不幸であると嘆き悲しむが、さまざまの欲望から解放されて、平和と自由がたっぷり与えられることは無上の喜びだ。」
四	喜びと財産との関係のソクラテスの指摘 ソクラテス「あなたが老いた喜びを得られる原因は人間の性格ではなく豊富な財産のおかげではないのか」 ケパロス「もっともな点もある。ただし、人物が立派でも貧乏していたら老年はあまりらくではないし、人物が立派でなければ金持ちになっても安心自足することはない」
五	財産の最大の効用とは ケパロス「やがて自分が死ななければならないと思ったときに、自分がおかしてきた不正を思い出して嘘をついたり恐れたり気づかいをしないようにするために役立つ」 →正義とはなにか？『ほんとうのことを語り、あずかったものを返す』を定義とすれば、気が狂った友達にあずかっていた武器を返すことも正義ということになるが…… ケパロス退場、ポレマルコスが議論を引き継ぐ。
六	『あずかったものを返す』といったときの「借りているもの」の定義 ポレマルコス「友に対して何か善いことをなし、悪いことはけってなさぬということ」 →発狂した友に武器を返すことは害になるので、「あずかったものを返す」ことにならない。 ポレマルコス「逆に、敵に対しては、何か悪いことをしてやることを負っている」
七	→ 正義とは、『友に対して善いことを、敵に対して悪いことを与える技術』 正義が有用な場面とはどんな場面か ソクラテス「その技術を持った正義の人は、どのような場合に能力を発揮するか」 ポレマルコス「戦いにおいて相手を攻撃する場合や、味方と協力する場合」 ソクラテス「戦っていない人々には正義の人は無用なのか」 ポレマルコス「正義は平和なときにも、契約、つまりお金に関すること、中でもお金を保管するときに有効である」 今の定義の問題点と修正 ①正義とは、『それぞれのものの使用にあたっては無用、不用にあたっては有用なもの』なのだろうか」
八	②あるものの有能な守り手は、そのものの有能な盗み手でもあるから、お金を守ることに有能な正義の人は、お金を盗むことにも有能であり、正義は盗みの術の一種となってしまう。 ③人は相手を善い人間だと思う場合に、その人間を友として愛し、悪い人間だと思う場合に、敵として憎むが、その判断をしばしば誤る。判断を誤った場合、善い人間(=不正をけつしてはたらないような正しい人間)を敵とみなし害し、悪い人間を友となし益することになるが、それも正義なのだろうか。 ポレマルコス「とんでもない！」→やはり正義とは、『正しい人間を益し、不正な人間を害すること』である ポレマルコス「善い人間だと思われる人が<友>であると規定したことが間違っていた。<友>とは、善い人間だと思われ、しかも実際にそうであるような者とする」

	→正義とは、『善き人間であるところの友に対しては善くしてやり、悪しき人間であるところの敵に対しては害を与えること』と定義し直す。
九	再定義へのソクラテスの指摘 ソクラテス「正義とは人間としての徳の一種であるが、その徳によって人を悪い人間にすることはできない。人を害するということは、不正な人のすることだ。だからこの定義は真実ではない」
一	聴衆の一人トラシュマコスの我慢爆発 ○トラシュマコス「答えるよりも問う方がやさしいことは百も承知のくせに！自分で<正義>とは何なのか、ちゃんと言いなさい！」 ソクラテス「(ふるえあがりながら)君のように能力のある人たちとしては、力の足りないぼくたちを怒るよりは憐れむほうが、ずっとふさわしい態度ではあるまいか」
一	ソクラテスとトラシュマコスとの対話 一 ソクラテス「君は自分が答えを知っていて、言うことができる」と主張しているのだから、是非惜しまないで教えてくれ」
一	トラシュマコスが思う『正義』 二 トラシュマコス「正義とは、『強い者の利益』である。強い者とは、自分の利益に合わせて法律を制定することのできる、権力のある支配階級のことである」 ソクラテス「正義が利益になることはわかるが、“強い者”の利益になるというのがわからないから、調べよう」
一	トラシュマコスとの『正義』に関する問答 三 トラシュマコスの同意 ①人間は誤ることもあるから、支配者たちも、被支配者たちに対して何ごとかをなすように命じるに際して、何が自分たちにとって最善であるかを見そこなうことがある。 ②被支配者たちにとっては、支配者の命じることなら何でも行い服従することが正しい。 →「支配者たちがそのつもりではないのに自分に不利益なことを命じたときも、被支配者たちにとってそれを行うことは正しいということになる。支配者たちに不利益なことを行うことも、利益になることを行うことと同様に、<正しいこと>である」
一	トラシュマコスによる「支配者」の定義 四 支配者たる者は、支配者であるかぎりには、けっして誤ることはなく、自分の利益になることをする。 ＝厳密な意味での支配者
一	「支配者である限りの支配者」についてのソクラテスの考察 五 船長が船長と呼ばれるのは、技術をもち、船乗りたちを支配することによる。ここで、技術とは[医術が身体に對するように]、はたらきかける対象の利益になることを考察するものである。したがって、支配者は支配者である限り、被支配者の利益になる事柄を考えて、それを命じる。
一	トラシュマコスのまくしたて 六 トラシュマコス「正しい人間は、不正な人間よりもきまって損をする。<正しいこと>とは、自分よりも強い者(=“他人にとって“)の利益である。それに対して最も完全な<不正なこと>は、不正をおかす本人(=“自分自身“)の利益になるものである」
一	検討のための同意事項の再確認 七 「すべての支配は、それが支配であるかぎりにおいては、ただもっぱら <u>支配を受ける側の者の利益のために</u> 、最善の事柄を考えるものである」
一	ソクラテスが『正義とは強者の利益だ、だから皆強者になりたがる』に賛成できない理由 八 ①技術はそれぞれ固有の利益をもたらす 技術にはそれぞれ異なっており、それがわれわれに提供する利益もそれぞれ固有のものである。たとえば医術がつくり出すものは、あくまで健康だけであり、報酬をもたらすのは報酬獲得術である。それと同様に考えると、支配という技術も、自分のための利益をもたらすわけではなく、支配される弱い立場の者の利益をもたらすだけだ。

一 九	<p>②すぐれた人物は支配者になりたがらない また、支配者になるべき人間が、もし支配することを拒んだ場合、自分より劣った人間に支配されるという最大なる罰を与えられる。支配者の地位につくことを承知する人は、名誉のためでなくお金のためでもなく、自分以上にすぐれた人たちも、自分と同等の人たちさえも見出せないがために、やむをえずそうするのである。だからすぐれた人物たちだけがいるような国家があれば、支配の任務から免れることが競争的になるはずだ。</p> <p>→『不正な人間の生活は正しい人間の生活にまさる』という発言に対して張り合うために、正義がどれだけの利点をもっているかを数え上げ、その利点同士を勘定し比較考量することにしよう。</p>
二	<p>トラシュマコスの主張</p> <p>○ ①<正義>よりも<不正>のほうが有利である。 ②不正は徳であり知恵であるのに対して、正義は悪徳であり無知である。 ③正しい人は、正しい人に対して相手をしのごう(注 481)とはしないが、不正な人に対してはしのごうとする。また逆に、不正な人は、正しい人に対しても不正な人に対しても、相手をしのごうとする。</p>
二	<p>ソクラテスの問答と矛盾点の指摘</p> <p>一 知識のある人は、他の知識ある人が為したり言ったりする事柄をしのごうとは思わないが、知識のない人に対してはしのごうと思う。また逆に、知識のない人は、知識ある人に対しても知識のない人に対しても、余計なことをしてしのごうとする。ここで、知識ある人とは、知恵ある人であり、知恵ある人とは、すぐれた人である。そうすると、(③より)正しい人は知恵がありすぐれた人で、不正な人は無知で劣悪な人となる。→②と矛盾</p>
二	<p>同意事項の確認と①の検討</p> <p>二 「<正義>は徳であり知恵であること、<不正>は悪徳であり無知であること」に意見が一致。 →<不正>は無知なのだから、<正義>は<不正>よりも強いものであることを示すのは簡単だが、他の方法で考察してみよう。 →「最も完全に不正な国」を考える。</p>
二 三	<p>→共同して何か不正を実行しようとする場合に、仲間同士で不正を働き合うと目的を果たすことはできない。 →<不正>はお互いのあいだに不和と憎しみと戦いをつくり出し、<正義>は協調と友愛をつくり出すものである。 →<不正>とは、不和と仲違いのために共同行為を不可能にさせ、神々を含む正しい者をも、敵とする。 →正しい人々のほうが、知恵においても徳性においても実行力においてもまさっていて、これに対して不正な人々のほうは、共同して行動を起こすことすらできない。</p>
二 四	<p>『正しい人々は不正な人々よりも善き生を送り、より幸福である』のさらなる検討</p> <p>①それぞれの技術には、それぞれの<はたらき>がある。その<はたらき>を立派に果たすために、それぞれの<徳>(優秀性)をもっている。 ②魂の<はたらき>は、配慮すること、支配すること、思案すること、およびこれに類することすべてと、生きることである。 ③魂の<徳>は<正義>であり、悪徳は<不正>である。 ④正しい人間は善く生きる。善く生きる人は幸せな人間である。だから正しい人間は幸せである。そして幸福であることは得であるから、<不正>が<正義>より得になるということは絶対がない。</p>

→ しかし<正義>それ自体がそもそも何であるかはわかっていないから、これまで出た「<正義>がなんのようであるか」もわかっていないことと同じだ。

■第二巻—<正義>がただそれ自体として讃えられるためのグラウコンとの対話

一	<p><善いこと>の種類</p> <p>①それをただそれ自体のために愛するがゆえに、もちたいと願うようなもの ②それ自体のためにも愛し、それから生じる結果のゆえにも愛するようなもの ③つらいけれども、そこから生じる結果の利益ゆえにもちたいと願うようなもの →<正義>は、その中でも一番立派なもの、②に属するだろう →しかし、一般には<正義>はつらいものの一種であると思われる。</p>
二	<p>グラウコンの主張の流れ</p>

	<p>[1]<正義>とは、どのようなもので、そのような起源をもつものと一般に言われているか</p> <p>[2]正しいことをする人々はみな、それを<善いこと>ではなく<やむをえないこと>と見なし、しぶしぶそうしている</p> <p>[3]人々のそういう態度は、不正な人の生のほうが正しい人の生よりもはるかにましであるから当然である</p> <p>グラウコンの主張[1] 一般に、自分が不正を受けてこらむる悪のほうが、人に不正を加えることによって得られる善よりも大きい、一方を避け他方を得るだけの力のない連中は、不正を加えることも受けることもない互いに契約を結んでおくのが得策であると考え、法律を制定することを始める。つまり<正義>とは、不正な仕打ちを受けながら仕返しをする能力がないという最悪なこと、不正をはたらきながら罰を受けないという最善のこととの、中間的な妥協である。</p>
三	<p>グラウコンの主張[2] 正しい人と不正な人のそれぞれに、何でも望むがままの自由を与えてやると、どちらも、自分が不正をはたらくことができると思った場合には、<不正>のほうが<正義>よりもずっと得になると考えて、不正をはたらくだろう。このことは、何ひとも自発的に正しい人間である者はなく、強制されてやむをえずそうになっているのだということの証拠である。</p>
四	<p>グラウコンの主張[3] 不正の極致とは、実際には正しい人間ではないのに、正しい人間だと思われることである。これと正反対に、正義の極致は、何ひとつ不正をはたらかないのに、不正であるという評判を受けることだ。この二人のどちらが幸せかはすぐに判定できるだろう。</p>
五	<p>グラウコンの主張の結論、まとめ 正しい人間は、鞭打たれ、拷問にかけられ、縛り上げられ、磔にされる。そして正しくあることをでなく、正しく思われることをこそ望むべきだと思知らされる。それに対して、不正な人間はより多くの権力や財産を得、より多くの犠牲を捧げ、神々からも人間からも、正しい人間にくらべて、より善い生活を得る。</p>
六 九	<p>アデイマントスによる補足 [1]一般に正しい人でなければならぬと説かれるのは、<正義>というものをそれ自体として讃えているのではなくて、<正義>（「正しい人であると思わせること」）がもたらすよい評判を讃えているのだ。 [2]<正義>は美しいが骨の折れる困難なものである。それに対して不正はたやすく自分のものとなる快いものである。さらに、不正が醜いとされるのはただ世間の思惑と法律・習慣上のことなのだから、不正を選んだ方が得である。 [3]みかけ（思われること）は真実にも打ち勝ち、この<みかけ>こそが幸福の決め手である以上、それに全力を注ぐほかない。 [4]みずからすすんで正しい人間であろうとする者など一人もおらず、不正をはたらくだけの勇気や力がないがために不正を非難するだけだ。<正義>がそれ自体として、<不正>よりも善いということを証明できた人はいまだかつて一人もいない。</p>
一 ○	<p>ソクラテスによる正義を考える糸口の提示 見やすく大きなところから考えるために、まずは国家における<正義>を探求しよう。そのためには、国家が生まれてくる次第を観察しなければならない。</p>
一 一	<p>国家はなぜ生じるか →多くのものに不足しているから。中でも、食料、次に住居、それから衣服類が最大のわれわれの<必要>である。したがって、農夫と大工と織物工が一人ずつ必要である。加えて、その他身の回りの必要品のためには、最低でも国家の成員は、4,5人である。 →そしてそれぞれが、自分の本来の素質に合った一つの仕事を、正しい時機に、他のさまざまなことから解放されて行うべきである。そうすると、農夫の道具一式を揃えるために、国民の数はもっと多くななければならない。 →さらに運搬のための動物や羊毛が必要だとすれば、輸入品の必要も出てくるだろう。そこで物の交換のためにもっとたくさんの職人が必要となり、貿易商や、海の仕事の専門家も必要となる。</p>
一 二	<p>→売ったり買ったりするために、市場に座りこんで売買のための世話をする小売商人なども必要。 ⇒どこから<正義>や<不正>が生じてきたのか調べるために、最低限の暮らしをして楽しんでいる人々の暮らしぶりがどのようなものかを考えてみよう。</p>

一	グラウコンの意見とその採用
三	真実の国家、健康な国家だけでなく、まず熱でふくれあがった贅沢な国家を考えることにする。その国はもはや必要のために国々のなかに存在するのではないようなさまざまなものを、数・量ともにいっばいに詰め込まなければならないので、国民ももっと増える。
一	戦争の起源
四	贅沢な国家のもとでは、領土も必要になってくるので、隣国の人々の土地を一部切り取らなければならない。そうすると、戦争に関する仕事を立派にしとげるために、そのための技術と自然的素質をもった軍隊が必要だ。
一	国の守護者の自然的素質とは
五	知覚が鋭く、敏捷で、強く、勇敢で、気概(=怒り、勝ち気、覇気などの激情)があること。ただし、味方に対しては穏やかで、敵に対してだけきびしい人間でなければならないので、気概のある性質と正反対の穏やかな性質も備えてなければならない。
一	穏やかな性質はどこから得られるか
六	身内の者や知っている者に対して穏和な人間となるのは、見た姿が味方か敵かを、知と無知によって規定することによって可能となるので、その人は、生まれつき知を愛し、学びを愛する人間でなければならない。
一	生まれつき知を愛するものの教育とはどのようにあるべきか
七	教育—身体のための体育 —魂のための音楽・文芸—言葉(話)—真実の言葉(話) —作りごとの言葉(話)=物語 ←ここから始める
	若くて柔らかい子供たちには、むごい話や、神々が神々と戦争したり、策略をめぐるし合ったり、闘い合ったりするような物語をけってしてはいけない。なぜなら若い人には、裏の意味とそうでないものとの区別ができないし、その年頃に考えのうちに取り入れたものは、なかなか消したり変えたりできないからだ。したがって、最初に聞く物語としては、徳をめざしてできるだけ立派につくられた物語であるように万全の配慮が必要である。
一	神々が戦争する話が間違っているといえるのはなぜか
八	神は、それが真に善い者である以上は、有害でも、有害の原因でもないはずである。多くの人たちはあらゆるものの原因が神にあると語るが、神は善いことについての原因であり、その他多くの悪いことについては、他に原因を求めるべきである。
一	「神がしたことは正しく善いことであり、悪人たちは懲らしめを必要としていたからこそ、みじめだったのであり、罰を受けることによって神から益されたのだ」と語るのなら、許される。
九	神が他のものによって姿を変えられることはありうるか あらゆる点で最もすぐれた状態にある神が、他のものによって動かされることは、最も起こりえない。
二	神が自ら姿を変えることはありうるか
〇	神は完全な状態にあるので、自らを変えるとすればより醜いものにならざるをえないが、自らすすんで自分を劣ったものにしようとする者はいないので、これはありえない。
	神が嘘をつくことがあるか 神々も人間も、ほんとうの偽り(=真実に関して魂において偽り、偽りの状態にあり、かくて無知であること、そして魂の内に偽りをもちまた所有していること)を何よりも憎む。
二	また、神は、全て真実を知っているので、できるだけ真実と思われるようにつくる偽り(=創作のための偽り)をする必要はない。
一	神に関するまとめ 神とは、行為においても言葉においても単一にして真実なものであり、みずから変身することもなければ、他の者を欺くこともなく、それらによってわれわれを惑わすこともない。 →したがって、国の守護者となるものに対して、神々の悪について語る間違った教育はすべきではない。